

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻126号 平成26年5月1日発行

「修身教授録」探求（第九十回）

発願（ほつがん）

森 信 三

諸君のうち昨日私が紹介した加藤完治先生の「日本農村教育」を少しでも読んだ人手を挙げてもらいなさい。（一人も手を挙げる者なし。）先生やや寂しそうな微笑をもらされつつ、諸君はまだ欲がないんですね。尤も若いから無理もないけれど…。この書物は「遺芳文庫」にちゃんとあるんですがね。私がそう申しておくよかったですね。しかしこの調子では私に一本勝つ人はちよっとなさそうですね。もっとも3学期ころになれば出てくるかも知れませんが…。松蔭先生は26歳の一年間に465冊の本を読んでおられます。つまり平均毎日一冊以上読まれた訳です。諸君とは人生に対する構え方に置いてちよっと桁が違うようですね。尤も松蔭先生なんかと比べられたんではお互いになわんですけれど…。しかし、道の上では師に譲らず」とも言って、学問求道の上ではたとえ先生たりとも遠慮は無用です。私の命のろうそくはもはや半ば以上消えています。しかし諸君のろうそくもすでに3分の1は消えているのです。真の人生と教育とは先ずこの点をしっかりと自覚することから始まると言って良いでしょう。

■発願（ほつがん）

今日は発願という題を掲げましたが、これは仏教では昔から使われている言葉のようです。つまりこの二度とない人生において我れ

如何なる事をなすべきかということについては心願を起すことであって、それを文章に書き表したものを「発願文」とも言います。そして今日その名の残っているような優れたお坊さんの中には、その人の発願文の残っている人も少なくないのであります。たとえば肥後の勤王家菊池家と関係の深かった大智禅師などには立派な発願文が残っています、今日でも曹洞宗の一部ではこれを読んでいるのであります。

■醉生夢死の生き方を反省

すでに度々申してきたように、この人生というものはお互いに二度と繰り返すことのできないものであります。が同時にまたその人の生き方いかんによっては、わずか50年そこそこの短い人生においても、よく不滅の精神に与かることができます。古来仏教では地獄極楽の説がありますが、要するにこれはこの人生においてよく不滅なる精神に与かるか否かになったという人間の二つの生き方を、無学な人々にも分かりやすいように説いたものであります。そこで今地獄極楽の説を信ずると否とは諸君の自由であります。しかしこの二度とない人生をいたずらに醉生夢死のうちに終わらないようにする覚悟は、我々にとって最も重要なことであります。

私はずっと以前には、この酔生夢死という言葉は単なる形容の言葉に過ぎないと思っていました。そうしてたとえ形容の言葉だとしても、ずいぶんひどいことをいうものだと思っていたのです。ところがこの七、八年以前

から、これは決して単なる形容の言葉ではない。いや我々人間の無自覚な事実をありのままに言い表した言葉だと感ずるようになってきました。ところが最近に至ってさらに一段と開けて、人間の無自覚な相はとも酔生夢死などという程度の言葉では表しきれないと感ずるようになってきたのであります。と申しますのは、酔っ払いという者は、なるほど酔っている間はまことに始末に困るものがあります。しかしどんな酔っ払いでもいつかは必ず覚める時が来ます。よほどの泥酔でも一夜を過ごせば大抵は醒めるものであります。また夢にしましても、いかに長い夢を見たとて夢ならば必ず消えて覚める時が来ます。

■長夜の眠りから醒めるべし

しかるにこの人生そのものの意義に目覚めない迷いの夢に至っては、いわゆる「長夜の眠り」でありまして、永遠に醒める期とてないのであります。かくして我々の心の迷いの醒めるのは、ただこの肉体を持っている間に

醒めないとしたならば、尽未来際永劫に醒める時とてないのであります。これを思えば酔生夢死などという形容の言葉は、まだまだ生ぬるいともいえるのであります。

ところがここに一つ困ったことには、眠っている者自身は自分が眠っているということに気づかぬということでありまして、その証拠に寝言を言った者が自分が寝言を言ったとは知らないのであります。同様に今この人生に対して無自覚な眠りを貪っている者は、早く心の目を醒まさなくてはいけないといいますが、当の眠っているご本人は自分が眠っているとは気づきませんから、心の目を覚ますとは一体いかなることであるか一向分からないのであります。これは古来聖賢高僧と言われるような方々が、その限りなき慈愛を以て教えを説いて止まなかつた所以でありましよう。そこで今諸君にしましても、「自分は過去20年の歳月をぼやぼやと眠りの中に過ごしてしまった」という深刻な自覚の起こらない限り、たとえ私の話を棒暗記してみたとしても役に立ちません。これ私が少なくとも修身科に関する限り、極力暗記試験を斥ける所以であります。そもそも私の話が諸君に分かつたという事は、諸君がこの人生に対して日本人として、さらには次代の国民を育成すべき教育者として、われ如何に生くべきかという目標を明確に把握することではなくてはな

りません。そうしてその極致においては「不束なる我が身ではあるが、願わくば生涯を通じてこの大願を成就せしめ給え」と神仏に我が生涯の大願成就を祈願するところまでゆかなければならぬといえましよう。そしてこの時諸君は初めて人生の真実なスタートを切るわけでありまして。

■漫歩流浪の人生を廃す

そもそもお互い人間はこの人生に対して明確な目標を打ち立てない限り、たとえどれだけ長生きをしてみたとして、要するに一生を漫歩流浪するに過ぎないわけでありまして。それはいわば睡りながらの汽車旅行のごときものに過ぎません。かく申せば諸君は「でも私たちはすでに中学の課程を終えたんですが」と言われるかもしれませんが。しかし私をして言わしむれば、一体諸君は過去五カ年の中学生活を通して人生の意義をいかなるもの知り、そしてかくの如き人生に対して如何に我が目標を立てるに至ったのでしょうか。生涯の目標さえ明確を欠く程度のフラフラした考えて中学を出てみたところで、それが人生の本質に対して如何なる意味があるでしょう。いやたとえ大学を卒業したとて、この根本の一点にして明確なるを得ないならば、一向大したことはありません。そもそもピストルが怖がられるのは、それによって狙われた場

合であつて、いかにピストルだつて天へ向かつてぶつばなしたり、地へ向けて撃つたりするんでは、どれだけぶつばなそうと何等意に介するに足りないでしょう。同様に今人間もいかにその人に才能があろうとも、もしその人にして自己の生涯をかけて為すべき目標を抱いていないとしたならば、かくの如き人間は毫も恐るるに足りないであります。これいわゆる小才子に過ぎないからであります。これに反してその才能はよし乏しくとも、とにかくに生涯をかけて我が為すべき目標を抱いている人間というものは、どこかに一脈の凄みを湛えているものであります。

■一日も早く、大願を建つべし

かく申せばあるいは諸君のうちには「我々の目標は国民教育者として立派な先生になることで、そんな事はすでに分かりきつたことではありませんか」という人があるかもしれせん。しかしその程度の考えでは未だに真に発願とは言えないのであります。いやしくも発願と言う以上、自分でなければ天下何人も成し得ないような独特の角度から生涯の目標を掴むものでなくてはならない。ただ普通に優良教師になろうの、または立派な教育者になろうのと言う位の事なら誰でも言えることであります。かくして発願と言う事は、これを儒教的に申せばまさに「立志」と言う言

葉がこれに当たるとも言えましようが、ただ発願という時いっそうその趣の深さがあります。とも申しますのは、単に立志というだけではどこかまだ自分というものを離れないところがあつると言えましよう。しかるに発願となれば、自己の一切を捨て自己の全生涯を捧げて、自己を越えたもののために尽くすという趣があります。かくして人間の生涯は願を起すに至つて初めてその真意義を発するとも言えましよう。諸君！諸君は今や皇国の国民教育者たらんとして果たしていかなる願を立てようとしていますか。これ諸君がこの世における唯一にしているかつ最大なる公案といふべきであります。

何か質問はありませんか。諸君は本校に入つてすでにまる3ヶ月が過ぎようとしています。少しは教育者になろうという志が立ちましたか。国民教育だけはいついかなる時代にも盛衰のない大道です。まあ、学期かかっても良いですから、しっかりと考えるんですね。そして9月の新学期にはかつてなかつたような強い人間に生まれ変わつてくるんですね。それにはまず偉人の伝記を読むことです。(上甲武雄記)

(修身教授録)第三巻 昭和18年9月1日同志同行社刊

処世語抄

その二

森信三

○親切と言う事は、他人のためにすることを目倒臭がらぬということ。

○宴会でボロを出すような人間は、それだけですでに人生の落伍者たる事を衆人の前に自ら広告するやうなものである。

○同僚より五分前に出勤する心構え；それが十年も積み重ねられた時、人間の大きなひらきとなる

○官公職にある者として一番大事な事は何かといへば、自分のもらっている俸給はその一円に至るまで、皆民衆の納めた税金だということをお忘れぬことであらう。

○計算には必ず検算のこと。このような必ずもう一度数えてみるという入念さ；これを黙々と十年も積み上げていくところに人に信用せられる人柄が出来上がる。

○公用で改まった場所へ出かけるときには、服装を整えて出かけるぐらゐの心がけが必要。そして自分の地位が上がったら、服装もそれ相当地に考えねばなるまい。

○人間は自分の全力を尽くし切つた拳句は、天に任せる外ない。

○実行の伴わない限り、如何なる名論卓説も画いた餅に等しい。

○失敗から教訓を学ぶことを知らない人間を、脳ミソが不足しているというのである。

日教組の闘争様式にも、こういうところがな

いとは言えまい。
○「不平なわけではないが……と不平に念を入れ。

○「欲しいわけではないが……」と我が欲を
言い。

○一日は一生の縮図……かくと悟って肅然た
る念がする時、初めて人生の真実の一端に触
れむ。

○死は生の完結点。

○組織の横暴を防ぐには、組織の全成員の自
覚による以外の途は無い。これが最大の難事
である。

○裏切られた恨みを、他人に語るな。その敵
しさを嘯み締めるところから人生の知恵は生
まれる。

○人間、生ある限りは進まねばならぬ。同時
にそのような人間の「死」は死そのものが、
後人にとって一番の教訓となるであろう。

○如何にささやかな事でも良い。とにかく人
間は他人のために尽くすことよって、自他
共に幸福となる。この事だけは確かである。

○苦難に耐える力……これこそが、真にその人
の人間のな力と言える。

○ユーモアは人間的叡智のおのずからなる発
露である。従って日本人にユーモアが足りな
いと言われるのは、日本人には真の意味での
教養者が少ないということであろう。

○食事を終えることに、心中感謝の念の湧く
人は真人と言えよう。いかにその難いこと
であるか……

○自分がつまずいてみて、初めて石のありが

の分かるのが、我々凡人の常である。

○世に、自分の欠点ほど分らぬものはない。
如何なる偉人といえども、自己の欠点のすべ
てを知り尽くしていたとは言えないのである
う。これ自己の対象化は、その本質的規定と
して、永遠に不尽根を残さざるを得ないこと
に基づく。

○小善なりとも積もう、小悪なりとも避けよ
う。

○正直の困難さを痛感できる人は真人であ
る。

○慈善の行為の背後に潜む虚栄心を突き止め
えて、慈善も真に浄められる。

○人間の最も慎むべきもの三つ。いわく金と
女と酒。

○我が子の家庭教育は朝の挨拶から。そして
その秘訣は親の方から先にすること。もしそ
れ一家の最高責任者たる主人が、毎朝先に「お
はよう」と妻に言えたら、その一事だけでそ
の家は理想の家庭となる。

○松江の名誉市民で今年82歳の土谷連之助
翁、身は豪商のご主人でありながら、人から
使いふるしの布切れを貰っては、それでハタ
キきを作って人々に配ることすでに数千本に
及ぶという。この間私もその一本を頂いてき
たが、それについていた紙片に曰く

「この頃は神も仏も皆稼ぐ」と、
市井の達人の老いて老いざる真面目を伺い得

て十分である。(「実践人」第41号昭和31年6
月号「処世語録抄2」)

あとがきに替えて

森信三先生の講義は一貫して内蔵をえぐるごとく生徒諸君の心耳に迫ったに違いない。先生の講義は先生自身の日常の感懐が、深くご自身の自覚となつて日々の教壇に反映された。しかも往時の国情を慮りつつ、国定の教科書を使わず講義の詳細を生徒に記録させ、逐一校長にプリントにして提出されたという。当時の校長も偉い！ 授業の全体に責任を持ちつつ、真摯に真剣にひたすら生徒の将来と国の行く末を、幸あれかしと願をなされた教師道は「修身教授録」に結実した。今日愚生をはじめ現代人が、森信三先生の息づかいに触れ得るありがたさを感じる。(28日二纂)

第135回「かよう会」のご案内

日 時 平成26年5月20日(火)
18時30分～(毎月第三火曜日原則)
場 所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)
06-6531-3686
交 通 地下鉄：四ツ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。
テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)
2300円(大きな書店で購入)
5/20自修の人
6/17老木之美
7/15故人に尽くす一つの途
参加費 1000円

〒63310003

桜井市朝倉台東2-538189
電話0744-4513422

Email:hiji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushin